



製材所で加工された木材。機械で用途に合わせた形に切り出す。

森林の機能を十分に発揮するには、継続的に手入れすることで森を循環させて、健全な状態を保つ必要があります。森の循環は、木の苗を植える「植栽」に始まり、成長を妨げる植物を除去する「下刈り」や「除伐」、ある程度成長した木を伐採して立ち木の密度を調整する「間伐」などを行いながら整備していきます。そして50年を過ぎ、収穫できるまで成長した木を「主伐」し、柱や板などの木材にするため切り出します。主伐を行った後の山は、再び新しい苗

### 森の循環と林業



林業の現場では「森林を次の世代につなげていくために、木が持つ温かみや良さを若い世代に伝え、興味を持ってもらうことが重要」という声もあります。市では、

### 木の良さをもっと身近に

木が植えられ、次の世代の森林になります。主伐された木材は、市場で競りに出され、競り落とされたものは製材所などへと運ばれます。製材所では、木材を用途に応じて切断したり、切り込みを入れたりして、木造住宅で使う柱や梁、床材などに加工されます。植栽から加工まで、林業の現場作業は多岐にわたりますが、最近では高性能機械の導入による効率化が図られています。戦後、人工林を造成した頃は、斧やのこぎりなどで木を切り倒して、その工程は手作業で行っていました。しかし、今ではプロセッサやフォワーダといった機械が導入され、木を切ったり、同じ長さにそろえて運び出したりする作業が、少ない労力で行えるようになりました。その他にも、製材所では木材を自動で必要な形に切ることができる機械が使用されるなど、林業従事者の負担軽減が進んでいます。



木材を利用したプランター

戦後、苗木を植えた先人たちの頃から脈々と受け継がれてきた森林を守り育てる、という思いが、今の緑豊かな森林を支えています。

大分の食や地産地消をテーマにしたイベント「おおいたマルシェ」で、地域の木材を使ったワークショップを開催するなど、木をもっと身近に感じてもらう、木材の地産地消について知ってもらう取り組みを行っています。木材供給だけでなく、災害防止や環境保全などの大きな役割を担っている森林は「植える、育てる、収穫する、使う」というサイクルで循環しています。そして、私たちの身近にある木の製品や木材は、この循環から生み出されているのです。

## 守り育てる — 森の循環と木が加工されるまで —

森林から切り出され、さまざまな用途に利用される木材。  
ここでは、伐採の適齢期を迎えた人工林を例に、森林のサイクルを見ていきます。

### 木の伐採から製材まで

#### 伐採



木材として利用できるまで育った木を切り倒します。伐採はチェーンソーなどを使って行います。

#### 造材



伐採した木の枝を取り払い、一定の長さに切断。プロセッサという機械で効率化が図られています。

#### 集材・運搬



プロセッサにより切られた丸太を運び出します。丸太をつかんで荷台に積み込むことができるフォワーダと呼ばれる機械です。間に集められます。

#### 製材・加工



丸太は原木市場などから製材所へ運ばれます。製材所では、木材を用途に応じて加工します。